白銀小

主体的に学び、自分の考えを表現できる子の育成

～導入から課題設定までのはたらきかけと考えを伝え合う指導の工夫～

（３年計画の１年次）

校長　本宮　共子

１　研究主題について

⑴　教育目標具現化の立場から

本校では「たくましく心豊かな子」を教育目標に、「明るく思いやりのある子、すすんで学ぶ子、健康にくらす子」を努力目標に掲げ、教育活動を展開している。その中で校内研究が特に担う役割は「すすんで学ぶ子」の育成である。学習をする上での基礎的な学習ルールを徹底させ、児童一人一人の学びの場である授業において、主体的に学ぶ態度を身に付け、自分の考えをもち、考えを伝え合うことで、よりよい解決につながることが確かな学力に結びつき、教育目標である「たくましく心豊かな子」の育成に寄与すると考える。

全ての児童が主体的に学び、自分の考えを表現することができるようにさせるためには、教師のはたらきかけと工夫が必要である。児童一人一人が「わかった！できた！身についた！」と実感でき、主体的に学習に参加することが、学校目標にせまっていくことができるものと考え、研究主題を設定した。

⑵　児童の実態とこれまでの研究経過から

本校の実態として、授業への集中を欠きやすく、学習課題の見通しがもてない児童が多い。また、基礎・基本の習得や授業中の課題の解決にも不安な児童が多い。そこで７年前からユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりに取り組んだところ、児童の学習への意欲が少しずつ高まり、学習の理解も深まってきた。昨年度は、「焦点化」を意識して授業することで、活動に見通しをもてるようになった児童が増え、児童の集中力も高まってきた。また、コロナ禍の中でも「共有化」の場面では、グループやペアで分担して発表させるなど、全体で自分の考えを伝える場の工夫が見られた。伝え合いを繰り返すことにより、児童はペアや全体等で話し合うことが抵抗なくできるようになり、理解が深まる姿も見られるようになった。

しかし、「焦点化」の充実には、ねらいに基づく発問や見通しをもたせる手立てや工夫がより求められ、「共有化」をどのような形で行うとより効果的であるのか、活動のさせ方の工夫が必要であることが分かった。

そこで今年度は、算数科においてさらに児童が見通しをもって課題に取り組めるよう、研究内容を導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけや手立ての工夫に絞り、児童全員が主体的に授業に取り組み、学ぶことができるよう実践していきたい。導入における児童の思考のずれに着目することで問いの意識を高め、さらに自分の立場を明確にすることで、学習課題を自分事として捉え、主体的に自分の考えをもち、その考えを伝え合うことで学びを深めていくことができると考える。

２　研究のねらい

授業の導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけと考えを伝え合う指導の工夫をすることで、主体的に学び、自分の考えを表現できる子が育成できることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

授業の導入から課題設定までにおける教師のはたらきかけと考えを伝え合う指導の工夫をすることにより、全児童の問いの意識を高め、見通しをもたせると共に、学習課題を自分事として捉えさせ、その考えを伝え合わせることで、主体的に学び、自分の考えを表現できる子どもが育成できるのではないか。

４　研究内容

⑴　授業づくりにおける導入から課題設定の場面で、子どもたちが見通しをもって取り組めるような手立てや方法を工夫する。

ア　導入で「思考のずれ」を生じさせる工夫をすることで、問いの意識を芽生えさせる。

イ　「立場の表明」をすることで、全員参加ができる場をつくり、主体的に問題解決へ取り組ませる。

⑵　子どもたちの考えの伝え合いが効果的にできるような手立てや方法を工夫する。

５　研究の経過

（1）研究仮説に基づく授業研究等

月	日	学年・授業者・題材名　等
9	7	第１回授業研究（６学年）　授業者　教諭　古川　裕子 題材名　算数「円の面積」
11	9	教育指導課訪問（計画訪問）　全学級授業
		第２回授業研究（要請訪問・３学年）　授業者　教諭　大庭　菜摘 題材名　算数「何倍でしょう」 講師　総合教育センター副所長兼主任指導主事　松橋　祐哉　氏
11	24	初任者研修実地研修「他校種研修」（５学年）　授業者　教諭　淡路　衣津季 題材名　算数「単位量あたりの大きさ」
1	31	公開授業（２学年）　授業者　教諭　類家　民江 題材名　音楽「きょくの　ながれ」

（2）一般研修

月	日	研修日の内容
4	27	校内における配慮を要する児童の共通理解
5	25	小・中ジョイントスクール全体会
6	29	個別の指導計画について
8	22	１人１台端末活用の研修　講師　白鷗小学校　教頭　吉田　悟　氏 教育課程研究集会（資料研修）
	31	県学力状況調査　学力分析の研修
11	16	小・中ジョイントスクール授業参観　情報交換
1	10	特別支援についての研修（さくら学級の実態と特別支援の手立て） 講師　さくら学級　荒谷　正博　野里　安紀　野月　陽子 児童生徒のための調査法の活用（「アセス」の理解と活用）気になる児童の対応について 青森県学習状況調査　分析・研修
1	18	県外研修報告会　発表者　淡路　衣津季

６　研究の成果

⑴ 校内で抽象的だった教師側の「思考のずれ」の捉え方が、少しずつ統一されてきた。導入から課題設定の場面では、教師の発問や課題提示などのはたらきかけから「思考のずれ」を生じさせることで、児童が「おや」「どうしてだろう」などという問いの意識をもち、課題を自分事として捉え、自力解決しようとする姿が見られるようになってきた。また、「立場の表明」では、１人１台端末や挙手、ネームプレートなどを使って児童全員が参加する場面を意図的に取り入れ、児童の考えを視覚化することで、問題解決へ取り組もうとする児童が見られるようになった。

⑵ 伝え合い活動では、ペアやグループ活動、１人１台端末を活用した取組など、児童が自分の思いや考えを伝え合う時間を徐々に増やすことができた。また、意欲的に自分の考えを伝えようとする姿が見られた。

７　研究の課題

⑴ 一部の児童の中には、まだ「思考のずれ」から問いの意識をもつことができない児童がいる。今後は、更に主体的に問題解決に取り組めるよう、児童の実態にあった「思考のずれ」や「立場の表明」を取り入れ、その後の展開に生かすために、効果的な発問や授業展開を工夫していく必要がある。

⑵ 全体として発言する児童に偏りが見られ、自分の考えを言葉にして伝えることへ苦手意識をもっている児童がいる。今後は、より意欲的に自分の考えを説明したり、話し合ったりすることができるように、児童の思考や能力に合った効果的な伝え合い活動を工夫する必要がある。次年度は、子どもたちが効果的に自分の考えを伝え合いができるような手立てや方法を工夫することに重点を置いて、研究を進めていきたい。

（記入者　大庭　菜摘）